アドバイジング・カウンセリング部門（IB740号室）活動報告

田 所 真 生 子

はじめに

2011年度，これまでの名古屋大学留学生相談室は，名古屋大学留学生センターアドバイジング・カウンセリング部門として新たに出発した。そして筆者は，2010年度後期より産前産後休業・育児休業に入られた高木ひとみ特任准教授の代替教員として，2011年５月16日付けで着任した。これまで高木氏が築いてこられた活動を引き継ぎつつ，2011度から新たに始まったG30国際プログラム等，関係諸組織と連携をとりながら対応するよう努めた。本報告では，2011年度着任以降の活動を大きく「相談活動」，「国際教育プログラム」，「授業・FD/SD 活動・その他」の３つに分け，主な活動について報告する。

Ⅰ．相談活動

2011年度は，月～金曜日の午前10時から午後４時までを相談時間としていたが，それ以外にも必要なときには適宜相談に応じていた。言語は日本語あるいは英語により行なった。相談件数と内容については，表の通りである。個々の相談をどのように分類し計上するのかは難しい。例えば，一度の来談で多くの分野にまたがる相談をする者もいれば，ある主訴で来談したとしても，よく聴いてみるとその背後にさまざまな問題が潜んでいる場合もあり，それらが複雑に絡み合っていることが多い。また，継続して面接をしていると，多様なテーマが現れることもあれば，多様な事柄の中に共通した一つのテーマが現れることもある。さらに面接中に得られた何らかのアイデアを人生や生活でのさまざまな局面に応用し，統合していくこともあるため，簡単に分類したり，一つにくくることは困難である。ここでは延べ件数をあげておくことにする。

相談内容であるが，７月に国際交流についての件数が多いのは，その時期に後述する国際交流プログラムの募集があり，それについての問合せがあったためである。カウンセリングとして継続して関わるケースで多くみられる傾向があるのは，心身不調・精神不安，将来の進路や就職について，学業・研究について，研究室や指導教員との人間関係等であった。

忙しい研究や実験と論文執筆等のストレスから心身不調・精神不安を訴えるケースが数件あった。ストレスと上手くつきあい，体調管理や自分をケアする習慣を身につけるためのプログラムを提供することが効果的ではないかと思われる。また同じストレスや不安を抱える学生同士のサポート・グループのようなものを作ることも有効であろう。

指導教員や研究室の学生たちと良好な人間関係を持ちたいと願いつつも，文化の違いやコミュニケーションギャップ等で，上手く関係を作ることができないという悩みを持つ傾向もみられた。研究室によっては慣習となっている暗黙のルールのようなものがあり，留学生が疎外感を持つケースがあった。また，教職員や他の学生が意識せずに口にした不用意な言葉や態度に傷ついたり悩んだり，ときには怒りを感じているケースもあった。さらに一般的に日本人が外国人に接するときの先入観や態度に対する相談もあり，日本社会への問題提起とも捉えることができた。留学生にも日本の文化の中でどのように人間関係を築いていくのか，本人の気持ちを大切にしつつ適応を促す支援が必要であるが，これから大学や社会の国際化がますます進んで行くのであるから，研修等の機会を通し，大学構成員の意識を高め，よりよい対応ができるように目指していく他，社会にも働きかけていくことが望まれる。

進路や就職については，望んでいた分野とのミスマッチや専攻の変更についての相談があった他，人生設計という大きな視点，長いスパンで捉え，進路や就職について取り組んで行くケースもあった。就職活動における具体的な対策（例えば，効果的な履歴書の書き方や面接方法等）については，キャリアディベロップメントオフィスと連携をとって対応することができ，筆者は主に相談者の内面的な自己分析やヴィジョ

ンの明確化，心的サポート等，キャリアカウンセリング的なアプローチで支援を行なった。

留学生がカルト集団に関わっているのではないかと心配する相談もあった。関係諸機関に相談・連携して対応にあたったが，大学としては注意喚起するといった方策以外，実際には難しいようであった。これについては留学生・一般学生に関わらず難しい問題であるが，日頃から周りの者が学生の変化に注意を向けておくとともに，学生が心の隙をつかれないようなサポーティブな環境作りが大切であろう。

相談件数記録（2011年５月～2012年３月）

相談内容	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	合計
指導教員・研究室						2	4	2	6	5	9	28
学業・研究・日本語			4	1		4	3	1	8	6	10	37
入国・在留関係	1	1	1	2						1	1	6
宿舎			1	1								2
奨学金・授業料				1			1					2
医療・健康			2		2	3		3	1			11
生活・適応			2		1	1	4	4	7	4	6	29
進路・就職・インターンシップ	3	1	6	2	3	7	5	2	10	5	11	52
帰国									1			1
家庭・家族			2	1		1	2	3	1	2		12
地域					1					1		2
人間関係		1	1			3	6	5	6	4	4	30
心身不調・精神不安	2	4	6	2	2	11	8	7	13	6	11	70
国際交流	1		33	1	5	3	2	4	1	1	1	51
その他	1	1		3	1	2	1	1		2	2	13
合計	8	8	58	14	15	37	36	32	54	37	55	346

Ⅱ．国際教育プログラム

着任当初は，他の教員が開催する研修やイベントに積極的に参加し，自分自身の学びの機会とするとともに，一般学生・留学生と交流を図り，カウンセラーとしての存在を知ってもらうよう心がけた。このような折りに様子が気になった学生に声をかけたことがきっかけで，カウンセリングにつながることもあった。

◆ スモールワールド・コーヒーアワー

2005年の後期より始まった「スモールワールド・コーヒーアワー」（以下，コーヒーアワーとする）を今年も継続して行なった。高木氏が不在の間，アドバイジング・カウンセリング部門事務室（IB 館）の白石氏がコーヒーアワーの開催や学生スタッフの支援をしてくださっていたが，筆者の着任により，引き続き協力を得ながら教育的支援について引き継ぐこととなった。

2011年度，学生スタッフはイベント内容をよりいっそう充実させることに重点を置き，「新生 Coffee Hour：一体感＆挑戦」という目標を掲げ活動を行なった。前期３回，後期３回の計６回のコーヒーアワーを開催し，約400人の参加者があった。前期のテーマは４月「自己紹介ビンゴゲーム」，５月「トランプ大会」，６月「Coffee Hour 縁日☆」，後期は，10月「自己紹介ビンゴゲーム」，11月「紅葉狩り＆しおり作り」，12月「日本の習字を体験しよう！」であった。

コーヒーアワーの開催は月に１度，各学期に３回ずつの計６回であるが，学生スタッフはその準備のために各回につき３～４回程度，ほぼ毎週１回のミーティングを重ねて企画を練っている。多数の参加者があり，入退場自由なイベントであるため，毎回テーマを発案することは容易ではないが，本年度は目標にも掲げてあるように，どのようなアクティビティにすると来場者が参加しやすく，分かりやすくて飽きずに，そして楽しく交流を促進できるのかを考えながら企画を進めた。学期の初めには，新入留学生を考慮し新しい出逢いの場を創るような自己紹介系のアクティビティを取り入れている。また，日本の文化に触れたり，季節感を味わえるようなテーマを選んだりした。本年度は新たな試みもいくつかあった。５月には初めてトランプ大会を行なった。11月には最初に構内の博物館野外観察園に紅葉狩りに行き，その後，拾ってきた紅葉を

使ってしおり作りをするという，いつもの開催場所である留学生センターラウンジを出てのアクティビティはチャレンジングであったが，温かい雰囲気の中イベントを終えることができたのには，学生スタッフたちも達成感と充実感を味わっていたようである。10月には，濵口道成名古屋大学総長が初めてコーヒーアワーの活動にご訪問くださり，国際交流活動の一端をご覧いただく機会を得た。

さて，コーヒーアワーを通して行なっている国際交流活動の表面的なイメージだけでは，「遊び」のイベントとして捉えられる可能性もあるが，実は様々な効果を生み出している。表の目的としては，留学生や一般学生，教職員を含めた大学構成員に国際交流を通しての新しい出逢い・つながりの場やリラックスした雰囲気の中での対話の場を提供することである。また参加者によって，交流や友達作り，言語の実践，留学情報収集といった様々な目的・意図を持ってやってくるが，それを叶える場であるといえる。そして，もう一つの目的として，リラックスした雰囲気の中で交流したり対話する場，友人関係を深めていくきっかけや場を提供することで，留学生が抱えているものが問題化あるいは深刻化するのを未然に防ぐ機会となるような予防的な側面や，学生同士のサポートの機能も兼ねている。さらに学生が主体となって協働で運営する活動を通して，イベントの企画・運営・ファシリテーション能力や交流のスキル，意識を高める開発的な側面も持っている。毎回コーヒーアワーの開催にあたっては，設営，受付，司会進行，茶菓子などのセッティング，後片付け等の実務的な作業があるが，それ以外にもイベント中には参加者のサポートなど気遣いやもてなしの心，創意工夫が求められる。イベント後には振り返りの時間を持っているが，学生スタッフたちは毎回何らかの気づきを得ているようである。

３月に本年度の活動の振り返りと引き継ぎの機会を持った。2010年度にコーヒーアワーの組織運営について考える合宿を行い，文書のテンプレート化やミーティングの方法など様々なことが話し合われたようであるが，それが上手く機能していたかを含め振り返りを行なった。緩やかな会であることのメリットと難しさがあるが，メーリングリストや学内外のソーシャル・ネットワーク・サービスの活用を見直し，使い方についての講習を行なった。ナビゲーターが組織全体の協力体制をナビゲートし，月担当者がその月ごとのイベントをまとめて行くというスタイルを踏襲しながら，新メンバーが続けやすい雰囲気や関係性をつくるためにメンター制を導入することにした他，スタッフ間のコミュニケーションの場をさらに大切にしていくことが確認された。後述するが，学生は授業やゼミの他，就職活動や留学などで活動に参加することが難しいことも多く，経験豊かな学生が卒業していくこともあり，そのノウハウの引き継ぎと新スタッフの勧誘，優秀な人材の確保が急務となっている。また，留学生を参加者としてだけではなく，スタッフとしてどう巻き込むかについても今後の課題である。

「卒業生を送る会」で，コーヒーアワーの活動で培ってきた経験がどれだけ豊かでかけがえの無いものであったかを涙ながらに語る卒業生を見て，また，コーヒーアワー OB･OG 同窓会に出席し，社会人となっても友情が続き後輩たちを気遣う様子を伺い，コーヒーアワーでの活動がいかに参加学生や運営する学生たちの成長の場となっているかを知った。今後も，このように多くの可能性を秘めた「コーヒーアワー」の活動を通じて，学生たちの成長を支えていきたいと願っている。

コーヒーアワーの風景　↓



↑ミーティングで“しおり”を試作中

◆ IF@N：名古屋大学国際学生フォーラム

グローバル・リーダー育成プログラムの一環として，2010年に第１回目の名古屋大学国際学生フォーラム（以下，IF@N とする）が開催された。2011年度は，特にグローバル・リーダー育成プログラムとしての単発のセミナーを開く機会は無かったが，引き続き第２回目の IF@N を実施した。第１回目は，国際交流協力推進本部の虎岩・渡部両特任講師がコーディネートしていたが，今回はそこに筆者が加わり３名のコーディネーターが担当した。

本フォーラムは「学生の，学生による，学生のためのフォーラム」であり，名古屋大学に集うさまざまな文化・背景を持つ学生が，日本語・英語による自由闊達な討議・意見交換を通して，国際理解や相互理解を深めること，またこの活動により国際的に活躍できる人材を育成することを目的としている。本年度は，国籍や学部・研究科，学年といった垣根を越えて一般学生10名と留学生３名の合計13名が実行委員会として企画・運営を行なった。フォーラムの詳しい内容については，学生実行委員によって作成された『第二回 IF@N:名古屋大学国際学生フォーラム活動報告書』と『名古屋大学国際交流グループ　2011年度活動報告書』をご参照いただきたい。

フォーラム自体は１日のイベントであるが，実行委員会は企画，運営，広報，報告書や引き継ぎ資料作成のすべてに関わり，これらの活動には多大な時間と労力を費やした。８月の顔合わせから２月の最終振り返りと打ち上げを迎えるまで，実行委員会だけでもリハーサルを含め計20回のミーティングを行なった。基本的には１回２時間ほどのミーティングであったが，時には何時間にも及ぶことがあった。ミーティング以外の時間にも，各自担当の仕事やディスカッションテーマの準備，広報，プログラム作成等の活動もあった。学生実行委員たちは，スカイプ等を使ってミーティングすることもあったようである。コーディネーターにとっても，本プログラムの立案，実行委員の募集から実行委員会の活動のサポート，円滑に進めるための打ち合わせ，学生たちのフォローアップやプログラム終了後の振り返りと次に繋げるための改善点の洗い出しまで，多大なコミットメントを要した。

第２回目となる IF@N 当日については，本年報の事業報告に詳しいが，前回と同じ「出会う，繋がる，広がる」というコンセプトのもと，「共生～地球という一つの国で～」というメインテーマを掲げ，「大学」，「国際社会」，「人生設計」，「文化，社会」，「コミュニケーション」，「エコロジー」の６つのサブテーマでディスカッショングループを設けた。そして，今回は新たな試みにも挑戦した。開催時間を長くし，参加者全員によるアイスブレーキングの時間を設けたり，ディスカッションの時間を増やしたこと，フォーラム参加者が昼食を一緒にとることで交流の時間を作ったこと，ディスカッション後の全体発表会の後，テーマの異なる参加者とグループになってシェアリングを行い，その後に思い思いのメッセージカードでコラージュを作ったこと，さらにフォーラム終了後には希望者で懇親会を開き親睦を深めたことである。これだけ盛りだくさんのイベントであったため，それにかかる準備や当日の運営も大変なものであった。

11月12日に開催された IF@N 当日には，35名（留学生13名）の参加者があり，それにファシリテーターである実行委員（１名欠席）を含めた47名が熱いディスカッションや交流を通して，有意義な時間を過ごした。それぞれのグループで工夫や協力をしながらディスカッションを進めていたようで，ディスカッション以外のアクティビティを含め，当日の参加者にとっても充実した貴重な体験となったようである。また当日参加者にとっては，たった１日のフォーラムでどれだけ充実した時間を持てるかを実感した体験であり，実行委員にとっては，たった１日のフォーラムを意義あるものにするために，どれだけの人々の頑張りが陰にあるのかを実感する体験であったことだろう。

本プログラム実施についての詳しい分析は別の機会に譲るが，いくつかの課題が浮かんできた。例えば以下の点が挙げられる。１．学生主体の活動にコーディネーターがどのような立ち位置で関わるのか，２．異なるスタイルを活かしどのように協働していくのか，３．スケジュール調整が難しい実行委員間の意思疎通や情報共有をどのように上手く行なっていくのか，４．日本語を母語とする者でも追いついていくのが難しい状況で，いかに留学生にも配慮し協力しつつ，多文化グループで共同作業を進めていけるのか，５．グローバル・リーダーに必要な能力やスキルを身に付けてもらうにはどのようにすればよいのか等である。これらの点を改善するため，2012年度は通年のグローバル・リーダー育成プログラムを企画し，名古屋大学全学同窓会支援事業の助成を受けて実施することとなった。

いずれにしても，当時は試行錯誤の中必死に取り組んでいた第２回のIF@N実行委員の活動を今になり振り返ると，実行委員の学生たちにとっても，教員コーディネーターにとっても大きな学びと成長をもたらしたことは確かであると思われる。このような試みは始まったばかりであり，まだ発展途上であるが，さらに良いプログラムとなり多文化共生に貢献できる人材を育てていけるように努めていきたい。





◆ 名古屋大学国際交流グループ／ Nagoya University Global Network 活動

名古屋大学では，国際交流や異文化理解を促進したり，留学生をサポートする活動を行なう学生グループが数多く存在し，キャンパスの国際化を支えている。留学生センターと連携しながら活動している「スモールワールド・コーヒーアワー」，「ヘルプデスク」，「ランゲージシャワー」，「留学のとびら」，「IF@N：名古屋大学国際学生フォーラム」，そしてサークル活動として長い歴史を持つ「異文化交流サークル ACE」や「名古屋大学留学生会 NUFSA」等がある。他にも活動しているグループはあるが，上述のグループが集まり，2009年度に「Nagoya University Global Network」が発足した。当時は，各グループの代表者がランチ・ミーティングを開く等，お互いのグループ活動の課題やニーズ，ネットワークの可能性等を意見交換していたようである。

本年度は，その中の「スモールワールド・コーヒーアワー」が中心となり，「ヘルプデスク」，「ランゲージシャワー」「留学のとびら」の４つのグループが合同で，名大祭（６月４日，５日）においてフリーマーケットを行なった。校費で賄うことの難しい活動の幅を広げるための資金を集める目的で行なうフリーマーケットであり，その売上金は協力団体の間で配分された。不用品の回収から値付けや販売まで，４団体が綿密に協力して進めることができたようである。この活動を通じ，団体を越えたスタッフの人材交流ができ，活動資金を得るだけでない非常に有意義な機会となったようで，頼もしさを感じた。

また，年度末には，今回は短期交流部門の北山特任講師の取りまとめにより，『名古屋大学国際交流グループ　2011年度活動報告書』を発行することが可能となった。詳しくは，活動報告書を参照されたい。報告書の発行に関して，印刷物とするのかあるいはペーパーレスとしインターネット上に掲載するのみとするのか意見が交わされた。印刷物として発行すると，形になることへの達成感，活動の周知や広報といった意義や，活動中に手元に置いて閲覧できるという利便性もあるため，今回も冊子として発行したが，今後の継続課題となろう。

筆者は全てのグループと関わりを持っている訳ではないが，伝え聞くところによると，多くのグループで，活躍しているスタッフが留学したり卒業してしまうなど，活動に積極的に関わることのできる人材をどう確保するのかが共通の課題となっているようである。国際交流活動の広報・周知や新スタッフの勧誘等，お互いに協力している試みも見られるが，グループ間のネットワークを強め，このような共通の課題を見つけ，お互いに助けあい，いい影響を与えあって，活動を発展させていくためにも，再びランチ・ミーティングのような意見交換の機会を設けるのもよいのではないかと考えている。

◆ オリエンテーション活動

本年度は着任したばかりということもあり，オリエンテーションのプレゼンテーションとしては，G30国際プログラム学生のための生活オリエンテーションをアドバイジング・カウンセリング部門の田中准教授と協力して行なった。

◆ ワークショップ活動

ハラスメント相談センターとアドバイジング・カウンセリング部門と合同で「多文化と恋愛」についてのワークショップを行なった。これは，一般学生と留学生たちにハラスメントと恋愛の違いについて考える機会を与えるワークショップであり，異文化における適応や対人関係の相違・摩擦について理解を促し，ハラスメント防止へとつなげるものであった。共同でグループディスカッションのファシリテーターをし，その後レクチャーを行なったが，ハラスメント相談センターの中澤氏が恋愛とハラスメントの違いについて担当し，筆者が異文化コミュニケーションの視点について担当した。学生にとっても恋愛は関心のあるトピックであり，参加した20名は活気あるディスカッションを通じて，他の文化や習慣を知り，自分の文化を見直す貴重な機会となったようである。

その他，学生相談総合センターが行なっているピア・サポート養成講座において，「留学生の諸問題・留学生のつきあい方」というテーマでレクチャーを行なった。一般的な留学生に関する基礎知識や名古屋大学の留学生や国際交流について紹介したり，留学生が相談したい内容について，異文化コミュニケーションや異文化適応のプロセス，そして留学生とのコミュニケーションで大切なことを説明した。ピア・サポートに訪れる留学生も過去にいたとのことであり，一般の学生にも留学生について理解してもらえるよい機会となった。

Ⅲ．授業・FD/SD 活動・その他

◆ 授業

後期の教養科目「留学生と日本－異文化を通しての日本理解－」の浮葉准教授を代表とする教員チームに参加し，主に「グループ活動から学ぶ」というまとめと振り返りの部分を担当した。

◆ FD/SD 活動

・毎月１回保健管理室にて開かれている症例検討会に参加した。保健管理室精神科医との連携をはかり，助言を得ることのできる，よい研鑽の機会となっている。
・高等教育研究センターが名古屋大学の教員有志により立ち上げた「留学生研究会」があるが，筆者も参加した。２ヶ月に１度の頻度で行なわれるこの会は，様々なテーマで意見交換がなされるが，例えば「名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック」HTML 版作成についての助言や，G30新規採用異様員のオリエンテーションについて協力することもあった。
・「留学生相談室スタディーグループ」は，2008年から高木氏が留学生支援や国際教育交流分野に関する勉強会として始めたグループであるが，現在は国際交流協力推進本部の渡部氏が引き継いで，月に１度の割合で開催されている。参加者は，名古屋大学教職員，大学院生，近郊大学職員であり，大学の垣根を越えて意見交換のできるよい機会となっている。プレゼンターとしては，「異文化理解とコミュニケーションスキル」と「一般学生と留学生の交流プログラム作りの課題」の回に協力した。

◆ その他

・本年度は秋よりG30国際プログラムが開始され，G30学年担任教員との連携ミーティングに３回出席した。
・学内外合わせ，できるだけ研修の機会を活用し研鑽を積むようこころがけた。本年度は，留学生支援や国際教育，多文化カウンセリング等の研修以外にも，「災害時外国人支援ボランティア研修･訓練」や「サイコロジカル・ファーストエイド」といった災害・緊急時の対応に関する研修に参加する機会を得た。今後の相談支援，教育業務に活かしていきたい。

おわりに

私事になるが，筆者は1999年４月から2004年12月末までの５年９ヶ月間，名古屋大学大学院国際開発研究科にて留学生担当助手・講師を歴任していたが，その後２度目の留学生活を送っていた。約６年半の年月を経て， 再び名古屋大学の留学生相談や国際教育交流

に携わる機会を得たことに，不思議なご縁と感謝の気持ちを抱かずにはいられない。日本への帰国が決まった矢先に東日本大震災が起き，海外から日本や被災地を想うことの複雑さと難しさを体験したが，そのような時期に帰国することについても考えさせられた。着任してみると，名古屋大学のキャンパスの変容に驚くこともしばしばあり，リエントリーショックと日本への再適応が自身の課題となった。古巣ともいえる場所へ戻ったことで，離職前に培っていたネットワークに支えられ，当時の知識や経験が役に立つこともあれば，時は流れ，留学生の受け入れ政策や国際化への要請も変化し，また部局ではなく留学生センターの所属となって全学の留学生の相談や一般学生も含めた国際教育交流に携わるということで，新たなチャレンジもあった。しかし，カウンセリング活動や国際交流活動における心理的・教育的支援を通して，学生たちの創造性や潜在可能性，成長していく姿に触れる機会に恵まれ，このような場に関われることに喜びを感じるとともに，筆者自身にとっても学びの連続であり感謝している。今後とも，多様な背景を持つ我々がお互い共に学び成長し，それぞれの持ち味が十分に発揮され活かせるような場創りを進め，支援していけるように，力を尽くしていきたい。